# 十一世紀のハラブにおけるカルアとマディーナ

谷口淳一

はじめに
一　支配者の據點とカルア
　1　ソバジェ説について
　2　ミルダース朝君主の據點
　3　ミルダース朝時代以前の支配者の據點
二　ハラブ市民の動向
　1　マンスール政權時代
　2　ミルダース朝時代
　　(i)　アフダースとライース
　　(ii)　騷亂時におけるアフダースの行動
おわりに

## はじめに

北シリアの都市ハラブ Ḥalab。その舊市街中央にある巨大な内城 qal'a は、今なお人目をひく存在である。その城門など現在見られる構築物は、ほとんどが十二・三世紀のザンギー Zangiyy・アイユーブ Ayyūb 兩王朝時代以降に建築

されたものである。(1) しかし、この時代になってはじめて支配者が内城を據點とし、その整備・強化に乘り出したわけではない。これに先立つ十世紀後半から十一世紀にかけてこそが、ハラブの内城が支配者にとって重要性を増していった時期であった。なぜこの時期にこのような現象が生じたのだろうか。この點については何人かの研究者がすでに觸れている。ハラブ自體の歴史という觀點からは、ソバジェ J. Sauvaget の研究(2)およびガウベ H. Gaube とビルト E. Wirth の共著(3)がある。またバカラク J. L. Bacharach は、イスラーム世界各地の都市における内城の機能を考察した研究(4)の中で事例の一つとしてハラブを取り上げている。これら先行研究には據るべきところも多いが、基本的な事實の見落としも見られるため、その説明をそのまま受け入れるわけにはいかない。

そこで本稿では、まず十一世紀を中心にハラブにおける支配者の據點と内城の關係を再檢討し、次いでその變遷の背景について考察する。これらの作業によって、當時のハラブを取り卷く狀況を把握することが本稿の主目的である。(5) と同時に、バカラクが提起した議論に關連して、本稿はより詳細な事例研究を提出することにもなろう。なお、ハラブに限らずこの時期の西アジア諸都市は、内城 qal'a とそれ以外の市壁内の市街地 madina, balad の二つに分けて把握されることが多い。(6) 本稿ではこの點に注目しつつ論を進め、「カルア」「マディーナ」という語をそれぞれ以上の意味に限定して用いる。

本稿で用いた主要文獻史料は次の通りである。(7) なお〔 〕内は引用略號である。

〔A'lāq〕 Ibn Shaddād, *al-A'lāq al-khaṭīra fī dhikr umarā' al-Shām wa al-Jazīra* (Ḥalab), ed. D. Sourdel, Damas, 1953.

〔BT. A〕 Ibn al-'Adīm, *Bughya al-ṭalab fī ta'rīkh Ḥalab*, ed. A. Sevim, Ankara, 1976.

〔BT. FM〕 ——, ——, facsimile edition, 11vols., ed. F. Sezgin, Frankfurt am Main, 1986—.

〔Ibn al-Shiḥna〕 Abū al-Faḍl Ibn al-Shiḥna, *al-Durr al-muntakhab fī ta'rīkh mamlaka Ḥalab*, ed. K. Ohta

(*The History of Aleppo; Known as ad-Durr al-Muntakhab by Ibn ash-Shiḥna*, Studia Culturae Islamicae 40), Tokyo, 1990.

〔I H〕 al-Maqrīziyy, *Ittiʿāẓ al-ḥunafāʾ bi-akhbār al-aʾimma al-Fāṭimiyyīn al-khulafāʾ*, vol. 2, ed. M. Ḥ. Muḥammad Aḥmad, al-Qāhira, 1971.

〔I Q〕 Ibn al-Qalānisiyy, *Dhayl taʾrīkh Dimashq*, ed. H. F. Amedroz, Leiden, 1908.

〔KT〕 Ibn al-Athīr, *al-Kāmil fī al-taʾrīkh*, 10vols., Bayrūt, 1985.

〔MB〕 Yāqūt, *Muʿjam al-buldān*, 5vols., Beirut, 1977.

〔MZ〕 Sibṭ b. al-Jawziyy, *Mirʾāt al-zamān fī taʾrīkh al-aʿyān*, ed. A. Sevim, Ankara, 1968.

〔SM〕 al-Muʾayyad fī al-dīn, *Sīra al-Muʾayyad fī al-dīn*, ed. M. Kāmil Ḥusayn, al-Qāhira, 1949.

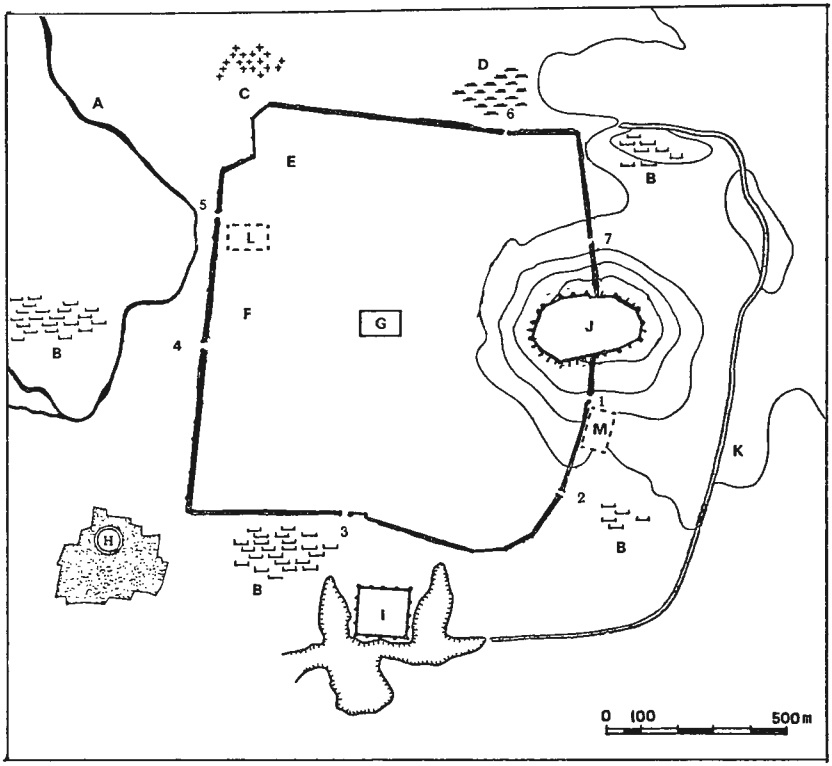
〔Y. CH〕 Yaḥyā b. Saʿīd al-Anṭākiyy, *Taʾrīkh al-dhayl*, ed. L. Cheikho, B. Carra de Vaux et H. Zayyat (*Corpus scriptorum christianorum orientalium* 51), Paris, 1909.

〔Y. KV〕 ——, ——, ed. & fr. tr. I. Kratchkovsky et A. Vasiliev (*Patrologia orientalis* 18/5, 23/2), Paris, 1924, 32.

〔ZH〕 Ibn al-ʿAdīm, *Zubdat al-ḥalab min taʾrīkh Ḥalab*, 3vols., ed. S. al-Dahhān, Dimashq, 1951—68.

## 1 支配者の據點とカルア

くラブのカルアはイスラーム時代以前から存在し、神殿としても用いられていたようである〔Sauvaget 1941: 29—30〕。イスラーム時代の初期にはくラブ自體が史料にあまり現れず、またアッバース ʿAbbās 朝からこの地方に任命されるワーリー wālī もくラブ以外の地に館を構えることが多かった〔Sauvaget 1941: 80—81〕。したがってそのカルアにつ




11世紀のハラブ概念圖〔Sauvaget 1941：圖版54より〕

1．Bāb al-Ṣaghīr　2．Bāb 'Irāq　3．Bāb Qinnasrīn　4．Bāb Anṭākiyya
5．Bāb al-Jinān　6．Bāb al-Yuhūd　7．Bāb al-Arba'īn
A．Quwayq川　B．ムスリム墓地　C．キリスト教徒墓地　D．ユダヤ人墓地
E．al-Zajjājīn 街區　F．al-'Aqaba 街區　G．Masjid Jāmi'　H．al-Ḥāḍir al-Sulaymāniyy 地區（トルコ人が居住）　I．Qal'a al-Sharīf　J．al-Qal'a
K．al-Khandaq al-Rūm　L．マンスールの宮殿推定位置　M．ファーティクの宮殿推定位置

いても言及されることは少ない。ハラブを首都としたハムダーン Ḥamdān 朝のサイフッダウラ Sayf al-dawla（ハラブ支配：三三三―五六／九四五―六七）は、ハラブ市街の西方約一キロメートルのハルバ al-Ḥalba に大規模な宮殿 qaṣr を造営したことで知られているが、マディーナの市壁やカルアの整備についてはあまり意を拂っていなかった。

ハラブのカルアにとって轉機となったのは三五一／九六二年のビザンツ軍による急襲である。この時サイフッダウラは逃亡し、殘されたハラブ市民は市壁とカルアの整備狀態の惡さから非常な苦戰を強いられた。そしてこの事件がきっかけとなって、サイフッダウラは市壁とともにカルアの整備に乘り出し、その事業は後繼者に引き繼がれていく〔Sauvaget 1941: 103; Gaube/Wirth: 168〕。

## 1　ソバジェ説について

このように十世紀後半になって、ハラブの支配者はカルアの重要性を認めるようになったが、それは直ちに彼らがそこを據點にすることを意味しない。以上の經過から見て、ハラブのカルアはまず避難・籠城の場所として再整備され始めたと考えられる。この後のカルアの據點化については、ソバジェがすでに言及しているので、彼の説を檢討しつつ論を進めることにする。[8] 彼によると、ビザンツ軍によってサイフッダウラの宮殿が破壞された後、その息子サアドッダウラ Sa'd al-dawla（在位：三五六―八一／九六七―九一）がカルアに住み、それ以來そこは君主の居住地になったという〔Sauvaget 1941: 102; cf. Gaube/Wirth: 168, 170〕。彼の説明の根據となっているのは、十五世紀以降に成立した Ibn al-Shiḥna[9] および十三世紀に書かれたイブンシャッダード（六一三―八四／一二一七―八五）の A'lāq[10] のカルアに關する記述である。前者のかなりの部分は後者の引用であり、ソバジェが根據とした部分についてもほとんど同じ文面が見出される。そこで本稿では、A'lāq の記述を利用する。ソバジェが利用した箇所は、サイフッダウラがカルアの整備に力を入れたという記事に續く次のような記述である。

彼の息子サアドッダウラは〔ハラブを〕支配した時に別の幾つか〔の建物〕を建て、そこ（カルア）に住んだ sakana。それは彼の父サイフッダウラが建て〔始め〕た市壁を完成させた時である。同様にミルダース朝はそこ（カルア）に館 dār を建て、その城壁 sūr を改修した〔A'lāq: 24; cf. Ibn al-Shiḥna: 40〕。

この記述からは、サアドッダウラの在位期にカルアが居城として使われ始めたと考えられる。ところがイブンシャッダードは、宮殿 quṣūr に關する章でマディーナ内外の宮殿について述べた後、次のように記している。

ハラブのアミールたちはミルダース朝の時代までこれらの諸宮殿に居住し iḥtalla 續けたのである。そして彼ら（ミルダース家）が、カルアに住んだ nazala, sakana 最初の者である。彼らはそれを、彼らの後に到來した支配者たち mulūk の慣行 sunna としたのである〔A'lāq: 29; cf. Ibn al-Shiḥna: 49〕。

ソバジェはこの部分に言及していないが、後者の記述に從うと、カルアが居城となったのはミルダース朝時代以降ということになり、最初に引用した部分と矛盾してしまう。したがってイブンシャッダードの記述だけからでは、ミルダース朝以前にカルアが據點として使われていたことについて確かなことは言えない。逆に、典據は確認できないものの異なった情報源に據ったと思われるこれら二つの記述が一致する部分については信頼度が高いと考えられる。すなわち、ミルダース朝の君主たちがカルアを據點としたという點については、かなり信用できると思われる。

以上の考察から、ソバジェの說は必ずしも確實な證據に基づいたものではないということが明らかになった。したがって以下では、彼が十分利用しなかった史料(11)をも用いて、支配者の據點について再檢討する。

## 2　ミルダース朝君主の據點

まずミルダース朝の諸君主について考察する。彼らがハラブのどこにいたのかということに關する情報が初めて見られるのは、初代サーリフの死（四二〇／一〇二九）以後である。彼の息子のうちナスル Naṣr 一世とシマール Thimāl が跡

**表1**　11世紀初頭〜ミルダース朝末期のハラブの支配者

| 統治開始年 | 支配者名 | 備考 |
|---|---|---|
| 394/1003—4 | Lu'lu' | Ḥamdān 朝の ghulām |
| 399 or 400/1008—9 | Manṣūr | Ḥamdān 朝の ghulām |
| 406/1016 | Fatḥ | Manṣūr の ghulām, wālī al-qal'a |
| ? | 'Aliyy | Fāṭima 朝前 Afāmiyya 總督 |
| 407.9/1017.2 | Fātik | |
| 413.4/1022.7 | Badr | Fātik の ghulām |
| ? | 'Aliyy | 前出 |
| 413.7/1022.10 | Muḥammad | 以下表2参照 |
| 416/1025 | Ṣāliḥ | Mirdās 朝 |
| 420/1029 | Thimāl・Naṣr I | 共同統治 |
| 421/1030 | Naṣr I | |
| 429/1038 | Banjūtikīn | Fāṭima 朝　表2参照 |
| 433/1042 | Thimāl | Mirdās 朝 |
| 449/1058 | Ibn Mulhim | Fāṭima 朝　表2参照 |
| 452/1060 | Maḥmūd | Mirdās 朝 |
| 453/1061 | Thimāl | |
| 454/1062 | 'Aṭiyya | |
| 457/1065 | Maḥmūd | |
| 467/1075 | Naṣr II | |
| 468/1076 | Sābiq | |
| 472/1080 | Muslim | 'Uqayl 朝 |

を繼ぎ、共同で統治を行なう。兩者の關係は「彼の死後その二人の息子がハラブを支配した。ムイッズッダウラ＝アブーウルワーン＝シマール Mu'izz al-dawla Abū 'Ulwān Thimāl はカルアの中を fī al-qal'a、シブルッダウラ＝ナスル〔一世〕Shibl al-dawla Naṣr はマディーナの中を fī al-madīna〔ZH：1/237〕というものであった。ところが四二一／一〇三〇年、ナスルはハラブ支配の獨占を目論んで、シマールがカルアから出ていった隙に乘じてそこを急襲し占據する。この事件についてはヤフヤーとイブヌルアディームの傳える二つの異なった內容の傳承があるが〔Y.CH：257；ZH：1/238〕、シマール不在の閒にナスルがカルアを占據し前者を追放したという事實は

共通している。[12] ハラブ支配の獨占を目指すナスルにとって、カルアの確保が肝要であったと言い得る。

この事件以後「カルアの諸門には鎖 silsila が設けられ、馬に乗った者 rākib が不意に上って來られないようになった。また、何人も刀を帶びてそこに入れないように決められた。たとえその者がカルアの支配者 mālik-hā とどんなに親しそうな人物でも」〔ZH: 1/238〕というように、カルアの警備が嚴しくなった〔cf. Sauvaget 1941: 102 n. 315〕。そして、以後ナスルはカルアに住み續けたようである。それは、四二三／一〇三一—三二年に彼に對して反亂を企てたライースのサーリムとアフダースが、カルアを襲擊しようとしている〔ZH: 1/249〕ことからわかる。ナスル以後の君主がカルアを據點としていたことを示す事例としては次の二つが擧げられる。

a　四六三／一〇七〇—七一頃アザーズ城 Qal'a 'Azāz のワーリーを務めていたアブームハンマド Abū Muḥammad は、友人でありマフムードの書記 kātib でもあるアブーナスル＝イブヌンナッハース Abū Naṣr Ibn al-Naḥḥās から手紙を受け取った。自分がマフムードと險惡な仲になっているにもかかわらず拜謁しに來るよう勸める內容を見て、アブームハンマドは疑問を抱いた。そこで彼は使者に「わが同胞アブーナスルはこの手紙を、彼の館 dār・役所 dīwān・カルアにおいてアミール（＝マフムード）の面前で bi-l-qal'a quddām al-amīr のいずれの場所でおまえに渡したのか」と尋ねた〔ZH: 2/37〕。このアブームハンマドの言葉から、マフムードの書記が君主に仕える場所がカルアであったことが窺える。

b　四六八・一〇／一〇七六・五、[13] ナスル二世 Naṣr b. Maḥmūd が斷食明けの祭 'id al-fiṭr の午後に、醉った勢いでトルコ人傭兵團を略奪しようとして逆に殺されてしまう。その時カルアには、ワルド Ward というカルアのワーリーの他にワズィールのアブーナスル＝イブヌンナッハースおよび側近 khawāṣṣ の一團がいた。そしてナスル殺害の情報が傳わると、彼らはナスルの弟サービク Sābiq をアカバ al-'Aqaba 街區にある彼の館 dār からカルアに連れてきて擁立する〔BT. A: 44—5, cf. ZH: 2/53〕。

以上の二例に見るように、少なくとも一〇七〇年代にはミルダース朝の君主たちは書記やワズィールを従えてカルアにいたのである。[14] ところが四二一／一〇三〇年以前のナスル一世や即位前のサービクの例から、ミルダース家の一族がマディーナに住むこともあったということは明らかであり、またシマールが第一回目の單獨統治期にマディーナに館 dār を持ったことを示す記事が見られるから、[15] 君主となった者でもカルア外に居住施設を持つことがあったと言える。しかし、ミルダース朝の君主たちがカルアに住んでいたというイブンシャッダードの記述や以上の事例を完全に否定するような證據が無い以上、[16] 少なくとも四二一／一〇三〇年以降のミルダース朝君主にとってカルアが平時においても重要な據點であったと言ってよいだろう。[17]

## 3　ミルダース朝時代以前の支配者の據點

ミルダース朝がハラブを支配する前の狀況については、A'lāq にはっきりと記されていないので、最初から他の史料の事例に據って考えなくてはならない。なお十世紀後半の狀況については、先に紹介した A'lāq の記述の矛盾を解決してくれるような事例を見出せず、結論を保留せざるを得ない。以下では十一世紀初頭に絞って考察する。

ハムダーン朝から政權を奪ったルウルウ Lu'lu'[18] の息子マンスール Manṣūr（在位：三九九または四〇〇―四〇六／一〇〇八・〇九―一六）は、宮殿 qaṣr とも館 dār とも呼ばれる住居を持っていた。ソバジェはこの事實を見落としている。そこで彼の宮殿に關する情報を年代記の記事から抽出し、考察を加えてみよう。

四〇〇／一〇〇九―一〇年以來三年にわたって、マンスールはキラーブ族と敵對してきた。彼らの攻勢に手を燒いたマンスールは、四〇二・一一・二八／一〇一二・六・二一に講和の交渉と稱してキラーブ族の要人をおびき寄せ一網打盡にする〔本稿：八四〕。その舞臺が彼の宮殿であった。

約七〇〇人が〔ハラブに〕入った。その中にはキラーブ族のアミールたち・指導力と勇氣の持主が全員いた。彼らが

彼（マンスール）を訪れるために、食べ物の數を數え食事を整えるよう命じられた。彼らはマンスールの館 dār に入ると、自分たちに關わる諸事の實行を彼が命じ、署名した負債を自分たちに履行するよう求めた〔Y.CH：211〕。

ここで突然マンスールは、キラーブ族を襲い有力者を捕えることを命じる。そしてキラーブ族のアミールたちはカルアに連行され拘留された〔Y.CH：211〕。明記されてはいないが、マンスールの策略の意圖から考えてこの約七〇〇人(19)の代表團は全員あるいはほとんどが宮殿に入ったと考えるのが自然であろう。したがって、この宮殿がかなり大きなものであったということが推定される。さらにアミールたちがカルアに連行されたことから、この建物はカルアの外にあったことがわかる。この宮殿については、イブンシャッダードが重要な記錄を殘しているので參照してみよう。

それら（ハラブの諸宮殿）の中に、ムルタダッダウラ Murtaḍā al-dawla〔＝マンスール〕がジナーン門 Bāb al-Jinān の內側 dākhir に造った宮殿 qaṣr がある。…中略…その宮殿はすでに倒れ荒廢してしまい、その場所には庶民 al-ʿāmma の小さないくつかの館 dūr が建てられた。〔アイユーブ朝の〕アルアズィーズ al-Malik al-ʿAzīz の時代（六一三―三四／一二一六―三七）になると、この場所をアミールのアラムッディーン＝カイサル＝アッザーヒリー ʿAlam al-dīn Qayṣar al-Ẓāhiriyy が買取り、それらを潰して隊商宿 qaysāriyya といくつかの油の貯藏槽 ṣahārij li-l-zayt・店 ḥawānīt をそこに建てた〔Aʿlāq：28―29〕。

この記述からわかるように、マンスールの宮殿はジナーン門を入ったところにあった。また、跡地に複數の住居や商業施設が建てられていることから、この宮殿はかなり廣い面積を占めていることがわかる。兩者の記述を總合すると、マンスールはマディーナ西部というカルアからかなり離れた場所に大きな宮殿を持っていたということになろう。

次に、彼がこの宮殿を據點にしていたかどうかを檢討する。マンスール政權末期にキラーブ族との戰いが激化し、ハラブは彼らによって糧道を斷たれる。この窮地の中でマンスールは、カルアのワーリー wālī al-qalʿa であるファトフ Fatḥ を、ミルダース家のサーリフが脫獄した〔本稿：八四〕責任を問うて更迭しようと考えた〔Y.CH：213；ZH：1/207―

08]。マンスールはこのことをスルール Surūr というグラームに知らせ、彼をファトフの後任に就かせようとした。スルールはイブンガーニム Ibn Ghānim という友人にこのことを知らせた。するとファトフの友人であった後者は目的を偽ってカルアへ上り、この情報を彼に知らせた〔KT：7/260（四〇二年の項）；cf. ZH：1/208]。マンスールの意圖を知ったファトフはカルアに籠城し、マンスールは使者を送って説得を試みるが、結局その奪回に失敗する。ファトフらは四〇六・七・二四／一〇一六・一・七の夜、カルアの上でサーリフを支持する叫び聲をあげた。それは、マンスールが「ジナーン門のところにある古い彼の宮殿にいる時」であった。サーリフにカルアが明け渡されたと思い込んだマンスールは、ジナーン門を出てアンティオキアへ亡命する〔ZH：1/209]。

この事件の經過からマンスールの據點について次のように考えられる。まず、イブンガーニムがカルアに上っていることから考えて、ファトフが反亂を決意する以前からマンスールはカルアにはいなかったということがわかる。さらに ZH の記述からは、この當時マンスールが宮殿にいたことが讀み取れる。ヤフヤーはこの事件について上の二人ほど詳しい記錄を殘しておらず、その記述からはマンスールがいた場所を示す情報は得られない。しかしまた、ファトフがカルアからマンスールを追い出したという記述もそこには無いので〔Y.CH：213—14]、前二者とは矛盾しない。したがって、この當時マンスールは宮殿におり、カルアはファトフに任せていたと考えてよいだろう。キラーブ族との戰爭中においてさえ彼がカルアにいなかったことを考えると、平時においても彼は宮殿にいたと結論できる。

マンスールを追放した翌月、ファトフが援軍として呼び寄せたアリー＝アッダイフ ʿAliyy al-Ḍayf というファーティマ朝下のアファーミーヤ Afāmiyya のワーリーは、「ハラブに至り、マディーナにある〔マンスール＝〕イブン＝ルウルウの館 dār に住んだ nazala」〔Y.CH：214；cf. ZH：1/213] という。その後交渉の末、ファーティマ朝よりイクターを與えられるという條件でファトフはカルアをアリーに明け渡してハラブを去る〔Y.CH：215—16]。したがってこの期間中は、アリーがマディーナに、ファトフがカルアにそれぞれいたということになろう。ただしファトフが去った後、ア

リー自身がカルアに入ったかどうかは明確でない。

アリーの單獨統治期は短かく、四〇七・九初頭／一〇一七・二初頭、新たにアズィーズッダウラ＝ファーティク ʻAzīz al-dawla Fātik が赴任する[20]〔Y.CH: 215—6; ZH: 1/216〕。ファーティクの住居については、アンターキーヤ門の北東にあるアカバ al-ʻAqaba 街區に館を持っていたことがわかるが〔BT.A: 44〕、どのような建物であったかを語ってくれる情報は無い。彼に關わる建築物としては、この館よりも次に掲げる宮殿の方がよく知られている。

〔ファーティクは〕ハラブのカルアの下にある taḥta qalʻa 宮殿 qaṣr を改築し、その建築を完成した。その宮殿の浴場 ḥammām は彼〔の建築〕に關わるものである。彼は、ムルタダッダウラ〔＝マンスール〕の身の上に生じたことを恐れて、それ（宮殿）をカルアの裾 safḥ al-qalʻa に結合させ、その建築によって自分がカルアの近くにいることを意圖した〔ZH: 1/218〕。

また、ZH の別の箇所に「イラク門附近の市壁の一部に沿ってマディーナに接しているその（宮殿の）壁 ḥīṭān」〔ZH: 1/261〕という説明が見える。以上の記述から、彼の宮殿はカルアの南側の裾に接し、また市壁を隔ててマディーナに接していたということが讀み取れよう。カルアと接續していたという點については、ヤフヤーの年代記からも確認できる。[21]

この宮殿の建設目的として、マンスールのようにカルアを奪われることに對する警戒心が ZH: 1/218 からの引用文中に擧げられている。イブヌルアディーム自身の解釋かファーティクの言葉が傳わっていたのかは不明だが、十分考えられる理由ではある。この宮殿はファーティクの死後も用いられた。この事例は四一五—六／一〇二五年と四三四／一〇四二年の二例があり、いずれの場合もファーティマ朝のワーリーたちがミルダース朝側の勢力に攻擊されてハラブを明け渡すという場面である。マディーナから退いたファーティマ朝側がこの宮殿に入り、まずここの攻防をめぐって寄せ手との間に戰いが繰り廣げられている點で、兩例は共通している。[22] つまり、ファーティクの宮殿はカルア攻防の上で重要な位置を占めていたのである。このことは、ZH の傳える建築目的を裏附けるものであると言えよう。

先に擧げたアカバの館とカルアの下の宮殿がファーティク自身によってどのように使い分けられていたかを直接示す例は無いが、このような建物をわざわざ造っているところから考えて、普段から彼がこの宮殿に住んでカルアを監視していたと推定できる。實際、四一三・四・四／一〇二二・七・七に彼が側近のバドル Badr というグラームに暗殺される〔Y. CH: 239〕まで、彼からカルアが奪われたという記述はどの史料にも見られない。

さて、ファーティクを暗殺したバドルは、主人に代わってハラブを支配する。その時彼は「カルアを支配した」〔Y. CH: 239〕とある。その後、彼の逮捕を任されたアリー＝アッダイフは、彼の地位を安堵するとしたハリーファ＝アッザーヒル al-Ẓāhir の親書を示し油斷させておいて、彼に近づいた。そしてアリーはバドルを「捕らえ、彼をカルアから引き下ろした」〔IH: 131; ZH: 1/221〕。以上のような經過から判斷すると、逮捕時にバドルがカルアに居たのは、解任を拒否し籠城していたためであるとは考えにくい。したがって、バドルはその短い統治期間中（四一三・四・四―七・一一／一〇二二・七・七―一〇・一〇）カルアを據點としていたと言えよう。

バドルが解任されてからミルダース家のサーリフがそこを征服する（四一六・五・一／一〇二五・六・三〇）までの三年足らずの間は、ファーティマ朝支配下でマディーナとカルアにそれぞれワーリーが置かれた〔本稿：九七―九八〕。これ以降のマディーナのワーリーがマディーナのどこにいたかを示す情報は乏しいが、マディーナにも支配者の據點があったのは確かである。

マディーナの宮殿に住んでいたマンスールの例から明らかなように、サアドッダウラ以來一貫してハラブのカルアが據點として機能したというソバジェの說は誤りであった。マンスール亡命後には、カルアを據點とする支配者やその確保に意を拂ってカルアに接した居住施設を造る者が現れたが、その一方でファーティマ朝はマディーナにワーリーを置いたのである。ミルダース朝時代になると、その君主たちはもっぱらカルアを據點とするようになる。このように、十一世紀初頭からミルダース朝時代にかけてのハラブにおける支配者の據點のありようは複雜である。しかし全體の流れとしては、

この時期に支配者にとってのカルアの重要性が増大し、マディーナからカルアへと支配者の據點が移動していったと考えられる。それでは次に、この變化の背景を檢討していくことにしよう。

## 二　ハラブ市民の動向

バカラクは、イスラーム世界各地の都市において内城が單なる軍事施設から支配者の據點となっていく現象の最大の要因として、セルジューク朝以降の少數の異民族による都市支配をあげ、またシリアに關してはヨーロッパ人（十字軍）の影響を指摘している〔Bacharach: 208—10〕。しかし本稿の考察によれば、十字軍のシリア侵入（一〇九八）やセルジューク朝のハラブ支配（四七九／一〇八六）以前に、すでにハラブのカルアが支配者の據點として使われていたことは明らかである。そしてこの理論が當てはまらないためか、バカラクはハラブにおいてはミルダース朝時代にカルアが支配者の據點となったことを認めながらもその原因については述べない〔Bacharach: 210—11〕。そこで本稿では、バカラクがあまり考慮しなかったマディーナ内の狀況について檢討する。この點に關してソバジェは、支配者と市民との閒の緊張が高まったことをカルアの據點化の理由に擧げているが、具體的な證據を擧げて論證しているわけではない〔Sauvaget 1941: 102〕。そこで、市民の動きを具體的に見ていくことがまず必要である。十—十二世紀のシリア都市民の活動についてはすでに研究が積み重ねられており、本稿の對象とする時期のハラブに限って言うとカーヒン Cahen とハーベマン Havemann が包括的な研究である。[23] ただし、前者はイラク・イラン地域をも對象とする廣い視野に立った研究である半面、個々の事例については不正確な記述がしばしば見られる。後者はシリアを重點的に扱い、具體例をかなり詳しく擧げた上で全體的な問題について論じているが、Y.CH と SM を用いていない點に不滿が殘る。以上の點を踏まえたうえで、兩者の成果を訂正し補いながら考察を進める。その際に取り上げるのは、支配者の據點が際立った對比を見せるマンスール政權時代（一〇〇八または〇九—一六）とミルダース朝時代（一〇二五—一〇八〇）である。

## 1　マンスール政權時代

三九九または四〇〇／一〇〇八—〇九年にルウルウが沒すると、息子マンスールがアミール位を繼いだ。マンスールの統治は住民の反感を買ったらしく、「ハラブの人々 al-Ḥalabiyyūn の多くは彼を嫌い、アブルハイジャー Abū al-Hayjā'[24] を望んだ。ハラブ地方 balad Ḥalab を取り仕切っている muddabir キラーブ Kilāb 族のアミールたちも同樣であった」〔Y. CH: 210〕。アブルハイジャーは反マンスール派の呼び掛けに應じて、まずマイヤーファーリキーン Mayyāfāriqīn へ赴き、マルワーン家のアフマド Aḥmad b. Marwān から約二〇〇騎の軍勢を得た後、キラーブ族のアミールたちと合流してハラブへ向かった。しかし、マンスールはファーティマ朝の援軍を得るとともに、キラーブ族にイクターの授與など種々の利權を約束し彼らをアブルハイジャーから離反させることに成功する。その結果アブルハイジャーは敗れてコンスタンティノープルへ亡命した〔Y. CH: 210—11; ZH: 1/199—200〕。

以上のように、反マンスール勢力の中には「ハラブの人々」すなわちハラブ市民が含まれていたが、その軍事力の中心はアブルハイジャーとキラーブ族の連合軍であり、ハラブ市民がこの戰鬪に關與していた形跡は見られない。

危機を脫したマンスールはファーティマ朝の軍隊を追い返し、キラーブ族に對する約束を破棄する。彼の違約に對してキラーブ族は戰いに訴え、マンスール側は劣勢となった。そこで彼は一計を案じ、講和の交渉と僞ってキラーブ族のアミールやムカッディマ muqaddima と呼ばれる要人を自分の宮殿におびき寄せて一網打盡にする（四〇二・一一・二八／一〇一二・六・二一）〔本稿：七八—七九〕。その後二年閒は、キラーブ族とマンスールの閒に小さな戰鬪が生じたものの後者の優勢は搖るがなかった。ところが四〇五・一・一／一〇一四・七・二にサーリフ＝ブン＝ミルダースが脫獄し、キラーブ族が彼の下に結集すると再び緊張が高まる。まず、マンスールの配下であるサーヒブたち aṣḥāb がグラーム軍を率いて出擊し、キラーブ族のキャンプ al-ḥilal（sg. ḥilla）を略奪し男女子供あわせて五〇人を捕らえてハラブに戻った〔Y.

CH: 211—12; ZH: 1/200—03]。緒戰の勝利に力を得たマンスールは、キラーブ族に對して決戰を挑んだ。その時の様子が次のように傳えられている。

〔マンスールは〕彼の軍隊 jund を集め、彼が力を與えた amkana スーカ al-sūqa・アウバーシ awbāsh・キリスト教徒 al-naṣrāniyy・ユダヤ人 al-yuhūd に對して、自分とともに出陣しハースィド丘 Tall Ḥāṣid の地へ行ってサーリフと戰うことを強制した alzama。同年二・一二／一〇一四・八・一二木曜の日沒後に彼は出發した。…中略…夜が明けるとアラブと對面し、兩者の間に戰いが起こった。彼の兄弟と彼らとともにいた一團が敗走し急いでハラブへ入った。殘りの人々 baqiyya al-nās も敗走し、〔キラーブ族の〕劍が彼らを捕らえた。彼らのうち約二〇〇〇名の男が殺された。マンスール＝ブン＝ルウルウとサーリム＝ブン＝ムスタファード及び將校たち quwwād やグラームたちの有力者 wujūh の一團が捕えられた〔Y. CH: 212; cf. ZH: 1/203—05〕。

以上とは別に、サーリフが放った間者の言葉として「彼の軍隊 'askar の大部分はユダヤ人とキリスト教徒から成る」〔ZH: 1/204〕という情報があり、また「軍隊 'askar の大部分と約二〇〇〇名のアーンマたち al-'awwām の歩兵 rājil が殺された」〔ZH: 1/205〕という記述がある。これらの記述から、マンスールがキリスト教徒・ユダヤ人という異教徒やアーンマ・スーカ・アウバーシと呼ばれる人々を戰に驅り出したことがわかる。後三者が具體的にどのような人々を意味するかは明らかでないが、スーカ・アウバーシという語は「ならず者」「群衆」というような意味合いで使われることが多く、またアーンマは廣く「庶民」一般を指すのが普通である。これらの語義から考えて、彼らはハラブ市民に屬する人々であると考えられる。マンスールが彼らに「力を與えた」とあることから、何か見返りがあったとも考えられるが、[25] 一方で彼は「戰うことを強制した」のだから、彼らは自發的に戰鬪に參加したわけではないのである。[26]

さて、上記のようにマンスールは捕えられるが、ハラブそのものは彼の兄弟アブルジャイシ Abū al-Jaysh が確保し、サーリフとの間で和解の交渉が持たれる。

彼ら（キラーブ族）はそのことについて使節を交わし、アブルジャイシをその確定の相手とした。ハラブ市民のアブルジャイシ側のシャイフたち mashāyikh min ahl Ḥalab min Abī al-Jaysh が和解の相談とその確定のために出かけた。…中略…彼らは無禮な言葉で語り、サーリフが彼らに對して求めた條件に反對した。彼は彼らからこのことを感じ取ると彼らに言った。「我々の閒で事態が決裂する前に、おまえたちのアミールに會って私と話し合うべき條件について相談しろ」。そこで彼らは立ちあがりムルタダッダウラ〔＝マンスール〕のところへ入った。…中略…彼らは兩者の閒を往復し續け、またハラブに入ってアブルジャイシと相談し續けた。そして、ようやくこの件はサーリフとの閒で確定した〔ZH：1/205—6〕。

この交渉の結果マンスールは四〇五・二・二二／一〇一四・八・二二に釋放されハラブに戻った。ところが彼は約束を完全には履行せず、再びキラーブ族と戰鬪狀態になる。マンスール側はビザンツ帝國の援軍を得て一時有利に戰うが、サーリフはマンスールの不誠實さを皇帝に訴えて同國軍を引き揚げさせることに成功する〔Y.CH：213〕。この窮地の中でマンスールがカルアのワーリーであるファトフを更迭しようとして逆にカルアを占據され、結局亡命するに至ったことはすでに述べた通りである〔本稿：七九—八〇〕。

以上の經過から次のことがわかる。まずキラーブ族との和平交渉に際して、マンスール側の代表團はハラブ市民に屬する人物で構成されていた。ここからも、マンスールが市民の一部と繫がりを持っていたことが窺える。このことは、ハラブをめぐって爭う兩陣營閒の交渉に市民が關與したことを示すものでもあるが、彼らの立場はあくまでもマンスール側の代表であり、それ以上の積極的な動きは見せていない。(27)

本節の冒頭で示したように、ハラブ住民の大多數はマンスールを嫌っていた。しかし反マンスール派のハラブ市民は外部の軍事力に頼るという形でしか反抗し得ず、その抗爭の中心は軍事力を持ったキラーブ族であった。一方マンスール側についていた市民も積極的・主體的な活動を見せていたわけではなかったのである。このような市民の狀態やマンスール

との關係が、後者がマディーナ内の宮殿に住んでいた背景の一つと考えられる。支配者がカルアを據點としたミルダース朝時代と比較すれば、この點は一層明らかになるであろう。(28)

## 2　ミルダース朝時代

四一五・九・一七／一〇二四・一一・二二、サーリフ＝ブン＝ミルダースは大軍を率いてハラブに到着し、書記 kātib スライマーン Abū Manṣūr Sulaymān b. Ṭawq に委ねていた先遣隊と合流してマディーナを包圍した。五〇日餘り激しい戰鬪が續いた後、アブルムラッジャー＝サーリム＝ブン＝ムスタファード Abū al-Murajjā Sālim b. Mustafād が市壁の門を開き、サーリフをマディーナに迎え入れた。この後サーリムはハラブのライース職 ri'āsa Ḥalab に任じられ、アフダースの指揮權を公認された〔Cahen: 16; Havemann: 93〕。

アフダース aḥdāth は「若者」を意味し、十―十二世紀のシリア諸都市においては特定の市民集團を指して使われる。またライース ra'īs は「頭」を意味する語で、アフダースの指導者・都市民の代表者として史料に登場する。彼らはかなりの軍事力を有し、それを背景にマディーナ内の秩序を維持する任務に就き、都市内の行政に大きな影響力を持った。また支配者に軍事力を提供して報酬を得ることもあった。さらには外來の支配者が都市をめぐって戰う場合に、そこのアフダースの動きが戰鬪の結果を左右することもしばしばある〔Cahen: 21―24; Havemann: 114, 118―9, 125―30〕。以下では、ミルダース朝時代のハラブにおけるアフダースやライースがマディーナ内において外來の支配者と對抗し得る存在であり、支配者がカルアを據點とした原因となるような存在であったかどうかを檢討する。

### (i)　アフダースとライース

この時期のハラブのライースとアフダースがその軍事力によってハラブの政治史に大きな影響を與えたことは、すでに

先行研究の中で具體例を擧げて示されている〔Havemann: 93—96; Cahen: 15—17〕。人數についても漠然とした數字ではあるが、多くても一〇〇〇人程度であったと指摘されている〔太田：三五〕。しかし、アフダースがこのような軍事力を持ち得た理由についてはいまだ檢討されていない。この問題に答えるために、彼らがどのような出身の人々で構成されていたかを考えてみる。

まず彼らの指導者たるライースのサーリムについて檢討しよう。父ムスタファードはサイフッダウラに仕えたグラームであった。そして彼自身は、「賞贊される名士たち a'yān かつ有名な將軍たち quwwād の一人である」と傳えられ、前述のハースィド丘の戰いでマンスールとともに捕らえられていることから〔本稿：八五〕、マンスール政權の下で活躍した有力軍人であったと考えられる。また彼の館 dār はマディーナ北西部のザッジャージーン al-Zajjājīn 街區〔Gaube/Wirth: 99, 105〕にあり、そこにはハンマームも附屬していたという。(29)

本節の冒頭で示したように、このサーリムがサーリフ＝ブン＝ミルダースからライースに任命されたことはすでに指摘されていることであるが、先行研究で觸れられていない點を含めて詳しく見ておく。サーリフは、カルアを包圍攻擊中に「サーリムをハラブに任命し wallā、そこにおけるライース職 ri'āsa とアフダースに對する指揮權 taqdima を彼に與えた」。(30) そして四一六・四・三／一〇二五・六・三、ハラブを離れてパレスチナへ轉戰する際にサーリフは、サーリムと自分の書記アブーマンスール＝スライマーンにカルア攻擊を任せている〔Y.CH: 247; BT.FM: 9/378〕。この後、カルアに籠城したファーティマ朝のカルアのワーリー＝マウスーフ Mawṣūf との和平交渉では、このスライマーンとともにサーリムも條約に調印しその履行を誓約している〔Y.CH: 247〕。このように、マディーナがミルダース朝に引き渡された後も、ファーティマ朝との戰鬪・交渉の兩面においてサーリムは重要な役割を果たしていることが確認できる。

次に、このサーリムが率いた集團について考えてみよう。先行諸研究のうち、彼らの出自についての具體的な言及は Zakkar: 259 にしか見られない。ザッカールは、アフダースの中にはサーリムと同じようなグラーム兵士が含まれてい

たであろうと推測しているが、彼がその根據として示すのはサーリムの經歷のみであり、確實な證據に基づいているとは言えない。そこで、次の記述が注目される。サーリフ＝ブン＝ミルダースがマディーナを包圍している時に、ファーティマ朝のマウスーフがサーリムを疑って殺害しようとした。これに對し次のような動きがあった。

そこでハムダーン朝のグラームたち al-ghilmān al-Ḥamdānīyya・市民 ahl al-balad から成る一團 jamāʿa が彼の下に集まり、彼に次のように言った。「我々の魂はあなたの下にあり dūna-ka、我々は全員あなたの味方で la-ka あなたに服屬し bayna yaday-ka あなたの命令に支配されて mutaṣarraf います」。彼とその一團は、すぐさま武裝し labisa al-silāḥ 獸獸に跨がって、ハラブのマディーナの諸門のうちのキンナスリーンという名の門へ向かい、それを開いてサーリフの下へ出て行った。そしてマディーナの人々の一團 jamāʿa ahl al-madīna に對する安全保證 amān を取りつけた〔Y.CH：246〕。

このように、サーリムに忠誠を誓ってともに行動したのは、武裝したハラブ市民とグラームである。「アフダース」という語が使われていないが、このすぐ後にサーリムがアフダースの指揮權を認められていることから、彼らはアフダースとほぼ同一の集團であると考えられよう。彼らの中にグラームという軍人が含まれていたことは注目に値する。從來アフダースの出自はただ漠然と「中下層民」と言われている中で〔Havemann：114—15；Cahen：24〕、これは貴重な情報である。また四三二／一〇三一—三二年にサーリムがナスル一世に對して反亂を企てた時にも、彼の下に結集したアフダースは武裝していたことが確認される〔ZH：1/249；BT.FM：9/379〕。

ハラブのアフダースは、一般市民のみが集まってできた集團ではなく、舊支配者層であるハムダーン朝の有力グラーム軍人の下にグラーム兵士と一般市民が合流して形成された武裝集團であった。(31) ハラブの支配者に對抗し得るほどの軍事力をアフダースとライースが持ち得た理由の一つは、この點にあると言えよう。

(ii) 騒亂時におけるアフダースの行動

ミルダース朝時代のアフダースが支配者間のハラブ爭奪戰に介入したり、彼らの遠征に參加したことはすでに指摘されている〔Cahen: 15—17; Havemann: 127; 太田：三五—三七〕。しかしマディーナ内での活動について具體例の分析を試みた研究は無い。彼らが公的な存在であったとするハーベマンの根據は、イブヌルアディームが彼らを非難していないということと、ライースのサーリムが支配者によって公認されたという二點であり〔Havemann: 116, 130〕、やはり具體性に乏しい。そこで以下では、騒亂時のアフダースの行動を檢討し、そこから彼らの性格を考察する。まず、ミルダース朝時代におけるアフダースがかかわった騒亂の事例を Cahen: 15—17; Havemann: 93—96 を補いながら年代順に示す。

a　四二三／一〇三二年　ライースのサーリムはナスル一世に反亂を企て、アフダースとならず者 ra'ā' を率いてカルア攻擊に向かう。

シブルッダウラ＝ナスルは、多人數を率いて彼が進擊してきたことを知ると、彼と戰うために自ら出擊し馬に乘ってむかって行った。彼（ナスル）を見るとハラブの人々 al-Ḥalabiyyūn は、彼を祝福し da'aw la-hu 彼に寢返って〔サーリム＝〕イブン＝ムスタファードの館を攻擊した。

その後サーリムはカルアに拘留され、その館は略奪を受けた〔ZH: 1/249〕。

b　四三三—三四／一〇四二年　ハラブ奪還を目指すシマールらをハラブの人々 al-Ḥalabiyyūn は一旦追い返すが、彼らとファーティマ朝の人々 al-maghāriba との間に爭いが生じ、雙方から死者が出て、政府の穀倉 ahrā' al-sulṭān が略奪される。ハラブの人々はシマールを呼び寄せ、マディーナのワーリーと市民 ahl al-madīna は降伏する。四三三・六・二八／一〇四二・二・二二、シマールがマディーナに入りアフダースが彼に合流する。ファーティマ朝のカルアのワーリーらは籠城し、ハラブの人々はカルアを攻擊した〔ZH: 1/260—61〕。

c　四四九／一〇五八年　シマールのハラブ放棄とファーティマ朝軍の進駐に際して騒亂が生じるが、アフダースとファーティマ朝軍の協力のもとで治安が維持される〔後述〕。

d　四五二／一〇六〇年　マフムードがハラブを狙う。アフダースがファーティマ朝ワーリーのマキーヌッダウラ Makīn al-dawla に報酬を要求するが後者は支拂いを拒否。そこでアフダースは彼に反抗してマフムードに使者を送る。マフムードが接近するとハラブ市民 ahl Ḥalab は al-Sharīf Mu'tamid al-dawla と Jalāl al-dawla[32] の館を襲い、二人は逃亡する。襲撃者の中にはおそらくアフダースが含まれていた[33]〔ZH：1/276〕。

e　四五七・二／一〇六五・一―二　アティーヤはアフダースとイブンハーン Ibn Khān のトルコ人 atrāk 軍團を率いて遠征し、歸還後「イブンハーンがハラブ〔のマディーナ〕に入った。ハラブの人々 al-Ḥalabiyyūn とアティーヤは彼を恐れた。アティーヤはハラブのアフダース al-aḥdāth min ahl Ḥalab を彼らにけしかけた aghrā」。そこでアフダースはトルコ人を夜襲し、イブンハーンは逃亡する〔ZH：1/295〕。

f　四六二／一〇七〇年　セルジューク Saljūq 朝の攻撃を避けるため、マフムードはフトバでアッバース朝ハリーファの名を唱えさせる。マディーナの有力者とアフダースはそれを受け入れたが、人々 al-nās やアーンマ al-'āmma は反抗する〔後述〕。

アフダースが單獨で略奪行爲を働いたことがはっきりしている例はeだけである。この場合も、市民やアティーヤがトルコ人軍團に對して恐怖心を抱いていた[34]という狀況下での行爲であり、略奪から得る利益だけが目的であったのではなかろう。史料の上からは、略奪そのものを目的とした行動をアフダースがとったという例は見當たらない。また、アフダースと彼ら以外の一般市民の動きが比較できる例を見ると、必ずしも兩者の行動が一致しないことがわかる。aでは、ナスル一世の姿を見た一般市民[35]がライースのサーリムを襲っており、fの例でも一般市民とは逆にアフダースはフトバの變更を受け入れている。またdにおいても、アフダースがファーティマ朝に反抗する態度を示しマフムードが接近してきては

じめて市民は略奪行爲に走っており、兩者の行動にずれが見られる。以上の點を一層明らかにするために、比較的情報量の多いcとfの事例を取り上げ詳しく見ることにする。

〔事例c〕四四八／一〇五六年にブワイフ朝の有力軍人アルバサースィーリー al-Basāsīriyy がイラクを追われてラフバ Raḥba に至りそこをミルダース朝から奪ったことがきっかけとなって、當時のハラブの支配者シマールと甥のアティーヤや他のキラーブ族の閒に爭いが生じた。この混亂を收拾しかねたシマールは、代わりの土地と交換にファーティマ朝にハラブを明け渡そうと申し出る。そこでファーティマ朝のマキーヌッダウラ＝イブンムルヒム Makīn al-dawla Ibn Mulhim が赴き、四四九・一一・二六／一〇五八・一・二四シマールは彼にハラブを引き渡した。(36) この時ハラブに滯在していたアルムアイヤドが興味深い記錄を殘している。彼の記述によって事態の推移を追ってみよう。

彼（シマール）は〔ファーティマ朝政府と〕書簡を交わし、ハラブの國 quṭr に駐留させるシフナ shiḥna を要求し、それ（ハラブ）とそのカルアの明け渡しをそれ（シフナ）に對して完全に遂行することを傳えた。しかしその明け渡しに關わる事項をどのように實行していくかについては、彼は明確にしていなかった。マディーナそのもの nafs al-madīna の中においては、アフダースと呼ばれる一派の者 qawm がその支配者 mālik よりもそれをよく支配し amlaku、そのワーリーよりもよくそれを掌握している aktharu istilā'。彼らとマグリブ人 al-maghāriba（ファーティマ朝）との閒には昔から憎しみと反目が存在し、その眼は眠っておらず借金は決濟されていない〔SM: 172〕。

このように、シマールはハラブのマディーナとカルアの明け渡しを約束したが、彼の同意だけではそれが無事行なわれる保證にはならなかった。そしてその理由はファーティマ朝支配を嫌うアフダースがマディーナを實質的に支配していたことにあったのである。このアフダースの抵抗を避けるために、ファーティマ朝側は次のような行動をとる。

ハラブに留まると氣づかれないように、イラク軍（アルバサースィーリー軍）への援軍という名目で到來する〔と僞った〕軍隊 al-'askar が通りかかった。そして彼らは〔ハラブに〕近附くと、自分たちのサーヒブたち ṣuḥba に贈ら

れたスルターン（ハリーファ＝アルムスタンスィル al-Mustanṣir）――アッラーよ、その王國を永續させ給え――の賜衣 khil'a を含む權威の證 ḥujja を彼ら（アフダース）に對して掲げた。〔ファーティマ朝軍は〕アフダースに對して、彼らに對抗する自分たちの武器 asliḥa の強さを知らせ、自分たちに從うためにマディーナ al-balad の外に出てくることを呼びかけた。彼ら（アフダース）がそのようにすると、彼らに對して門を閉じ彼らがそこに入るのを妨げる者が諸門に配置された〔SM：172〕。

ファーティマ朝軍は通過を裝ってハラブに接近した上で、實は駐留が目的であったことをハリーファの賜衣などを示して明らかにした。不意をつかれたアフダースは相手の軍勢の大きさを知り、抵抗を諦めてマディーナの外へ出てファーティマ朝軍に投降したのである。

ここまではファーティマ朝側の計略が成功し、アフダースの抵抗をかわすことができた。ところが、スンナ派を奉じる人々 al-'āmma がアフダースの投降とファーティマ朝軍の進駐を知るや、[37] マディーナ内に騒亂が生じ、シマールはカルアに避難した。騒亂狀態の中でアルムアイヤドはファーティマ朝の支配を受け入れるようにと教宣を行ない、最終的には進駐軍が歡喜のうちに迎え入れられた〔SM：172―73〕。

アルムアイヤドは宗教的對立に騒亂の原因を求め、自分の教宣によってそれが鎭まったという點を強調し、それ以外の情報を傳えてくれない。この閒のアフダースの動きも不明であり、ハラブに入った軍隊も「勝者の軍隊」al-'askar al-manṣūr とあるだけで、果たしてアフダースがそこに含まれていたか否かは明確ではない。しかしアフダースがファーティマ朝に投降してマディーナ外に出ていることを考えると、騒亂の主體は彼らではなかったと思われる。その夜に再び生じた事件に際しては、アフダースの動きがはっきりと見られる。

彼ら（駐留軍）がマディーナに入った夜、心中では一方は他方を死のように恐れながらも、兩部隊（ファーティマ朝とアフダース）が互いに合流した ikhtilāṭ al-fariqayn。彼らはまるで、アッラーが完全なるその書物の中で「彼らは團結

しているとおまえは思うだろうが、その心はばらばらである」〔『クルアーン』五九／一四〕と述べておられる如くであった。

その時、〔シマール＝〕イブン＝サーリフがいる寝室 marqad で火の手があがるという事件が生じた。…中略…マディーナに満ち溢れていた人々 al-nās にはこの〔火災に關する〕情報 qiṣṣa は知られていなかった。彼らの間に叫び聲が起こった。この闇夜の中で耳を失った騒亂 al-fitna al-ṣammā' にもう少しで剣が振りおろされるところであった。次のように詠まれているが如くに。「その夜は暗く隊長たち kibāsh は相爭う。首が無事であったものはすなわち勝利したのだ」。

至高なるアッラーのおかげで、ハラブのアフダースたちの脚がイカール 'uqul やシカール shukul[38] で縛られて愚かなことに至らなかった。彼らは眞夜中に私に驅け寄り、命じられる通りに實行すべく、自分たちが行なうべきことについて私に尋ねた。そこで私は彼らを祝福し、市街の掌握 ḍabṭ al-balad と軍隊としての警備 ḥifẓ al-'askariyya を命じた。そこで彼らは自分の魂に自分たちを避難させ、その心の恐怖を靜めた。彼らは「我々の財産 amwāl や女性たち ḥarīm とともに、我々はあなたを守りましょう」と言った〔SM：173〕。

實はこの火事はシマール自身の不注意によるものであったが〔SM：175〕、夜であることも手傳って一般市民には情報が傳わらずマディーナ内は混亂に陥ったのであった。「耳を失った騒亂」とは正確な情報を得られずに不安に驅られた人々の騒亂狀態を譬えたものであろう。一方引用文の冒頭からわかるように、アフダースとファーティマ朝軍の間には不信感が存在した。さらにアフダースが愚行に走らなかったことをアルムアイヤドが感謝しているように、彼らもこのような騒亂狀態においては暴動に加わる可能性を持った存在であった。しかしアフダースは動搖を見せつつも、自分たちの財産や女性を守るために治安維持の役目を果たした。「マディーナに満ち溢れていた人々 al-nās」が叫び聲をあげて混亂していたのとは對照的である。

〔事例f〕四六二・一〇／一〇七〇・七、セルジューク朝のアルプアルスラン Alb Arslān がシリア方面に進出しようとしているという情報を入手したミルダース朝のマフムードは、彼の攻撃をかわすために、フトバ khuṭba においてアッバース朝ハリーファ＝アルカーイム al-Qā'im とアルプアルスランの名を唱えさせることにした。マフムードの説得に對してマディーナの有力者たちは理解を示しその提案を受け入れた。しかし實際にフトバが唱えられる金曜日になると、この變更をめぐって騒動が生じた。(39)

その翌日すなわち金曜日になると、ハティーブ khaṭīb とムアッズィンたち mu'adhdhinūn は〔アッバース朝の色である〕黒裝束で bi-l-sawād 現れた。彼らを見ると人々 al-nās は驚いた。ハリーファ〔＝アルカーイム〕とスルターン〔＝アルプアルスラン〕の名が唱えられると、彼らはジャーミ al-jāmi'（會衆モスク）から逃げ出した。別の金曜日 al-jum'a al-ukhrā に、マフムードはイブンハーンと彼の率いるオグズ al-ghuzz をジャーミの門の前に並ばせて言った。「〔フトバを聞くことを避けるために〕出てくる者、入らない者は誰でも殺せ」。マディーナの長老たち mashāyikh al-balad とアフダースが氣づき、略奪を恐れた。そこで彼らはマフムードに會って「我々にとってオグズは不要だ。我々がそれを行なおう」と言った。彼らはジャーミの門の前に立ち、ついにハティーブはフトバを行ない人々 al-nās は禮拜を行なった。〔しかし〕アーンマ al-'āmma はジャーミの敷物を占據して言った。(40)「これは、アリー＝ブン＝アブーターリブ 'Aliyy b. Abī Ṭālib の敷物だ。その上で〔人々 al-nās が〕禮拜をするための敷物を、アブーバクル Abū Bakr が持って來るべきだ」。人々は暫くの間、地面の上で禮拜を行なった〔MZ: 142—43〕。(41)

マディーナの有力者たちとともに、アフダースは信仰に關わる問題よりもハラブの安全を選んだ。最初の金曜日にジャーミから逃げ出した人々や、別の金曜日にジャーミの敷物を占據したアーンマと呼ばれる人々とは違い、大局的かつ冷靜な判斷を下したと言えよう。また、マフムードが禮拜を強制するために動員したトルコ人兵士を排して、彼らが監視の任

務についている點も注目される。

以上の騒亂中における行動の分析を通して、おぼろげながらミルダース朝時代のアフダースの性格が浮かび上がってくる。上の事例に現れた彼らの行動の主目的は、ハラブの安全と治安を確保することであり、この目的のために彼らは現實的かつ冷靜な行動を取ったのである。その意味では、アフダースが治安維持の任務を果たしたと言えるだろう。しかし彼らはあくまでも自分たちの財産や女性を守るために行動したのであり、場合によっては支配者や他の一般市民と對立することもあったのである。また騒亂時に必ず治安維持に當たるわけではなく、暴動に參加してマディーナ内を混亂に陥れる危險性を持った存在でもあった。一方事例c・fからわかるように、アフダース以外の一般市民やアーンマと呼ばれるような人々こそが、騒亂狀態を作り出す中心となっていた。彼らの行動は冷靜さを缺いており、アフダースと對照的である。

アフダースとマディーナの有力者・一般市民との關係など未解決の問題はあまりにも多いが、(42) これらの點については現在のところ十分論じられるだけの材料を持ち合わせていない。しかし本稿の關心に卽して言えば、次のような結論が導き出せよう。マンスール政權下において、ハラブ市民は軍事力などとして利用されることはあれ、支配者から獨立した動きを見せることはなかった。ところがミルダース朝時代に入ると、アフダースの活動が見られるようになる。彼らは、前政權のグラーム兵士を含み、必ずしも支配者に從わず主體的な動きを見せる集團であった。そしてマディーナにおける彼らの勢力は、アルムアイヤドをして「その支配者よりもそれをよく支配し」ていると言わしめるほどであった。このように軍事的にも行動の主體性においても一般市民とは一線を劃しつつマディーナ内に勢力を伸ばしたアフダースが支配者の脅威となったことは想像に難くない。ミルダース朝時代のマディーナ内の狀況はマンスール政權時代と大きく異なっていたのである。つまり、マンスールがマディーナ内に宮殿を構え、他方ミルダース朝の諸君主がカルアを據點としたという事實の背景として、アフダースとライースの登場による支配者と都市住民の緊張關係の高まりというマディーナ内における

状況の變化が指摘できるのである。

## おわりに

マディーナ内の状況の検討を通じて、ハラブのカルアが支配者の據點となっていた背景を考察した。もちろん、以上の議論は事實の一面を捉えたものに過ぎない。とくにマディーナ内の状況に焦點を絞って検討したため、支配者側の要因についてはほとんど觸れなかった。しかし最後に一つだけ述べておかなくてはならない點がある。それは、ミルダース朝時代においても、ファーティマ朝の直接統治期にはマディーナとカルアの兩方にワーリーが任命されている〔表二〕という事實をどう考えるかということである。前章で紹介したアルムアイヤドの記述〔九二―九四ページ〕から窺えるように、ハラブ市民やアフダースがファーティマ朝の支配をとくに好んで受け入れていたとは思えない。したがってミルダース朝の君主たちがカルアを據點としていた時代にあえてマディーナにワーリーを置かなくてはならなかった原因は、ファーティマ朝側にあったと考えられる。ワーリーのファーティクが暗殺された〔本稿：八二〕後にそれまで一人であったワーリーがカルアのワーリーとマディーナのワーリーの二人に增やされた理由は、ファーティクが獨立する動きを見せたことに對する反省からカルアとマディーナの支配權を分離したことにあると言われている〔Sauvaget 1941: 102 n.314〕。ここにファーティマ朝側の事情があったのではないだろうか。その根據となる記述は、イブヌルアディームの著作にまで遡れるが、簡單な記述なので(43)實際にワーリーたちの行動や經歴を調べてみる必要がある。

まずミルダース朝時代以前（四一三―一六／一〇二二―二五年）について見ると、カルアのワーリーは、表二の①で示した人物がそれぞれ任命したとなっているが、③に示してあるように「アッザーヒルの權威下に min qibal」と注記されている。さらに、マディーナのワーリーが三人ともクターマ族の有力者であったのとは對照的に、カルアのワーリーは二人ともハーディムkhādim（宦官）という肩書きを持っており、ハリーファとの親密な關係を想定できる。したがって彼らはマ

ディーナのワーリーから獨立してハリーファに直屬していたと考えられる。(44)

ミルダース朝時代の例を見よう。四二九―三三／一〇三八―四二年にハラブを支配したワーリーたちはすべて、ディマシクにいたアヌシテギン＝アッディズビリー Anūshtikīn al-Dizbirīyy に任命されており、また彼のグラーム・マムルークといった身分である。カルアとマディーナのワーリーの閒に主從關係を示すような記述は無く、兩者は互いに獨立してアッディズビリーに直屬していたと考えられる。(45) したがって、ハリーファ＝アルムスタンスィルがワーリーを置いたとするイブヌルアディームの記述〔本稿：一〇五註四三〕は不正確であるが、カルアとマディーナの兩ワーリーの關係に關してはミルダース朝以前の例と同樣であると言える。最後の四四九―四五二／一〇五八―六〇年の例は、カルアのワーリーに關する情報が少なく、分析できない。

すべての事例について分析できたわけではないが、少なくとも檢討し得た範圍では、カルアのワーリーとマディーナのワーリーは互いに獨立し、それぞれハラブ以外の地にいる人物に直屬しているという特徵が見出される。ファーティマ朝の邊境に位置するハラブの支配權を二つに分割し、ワーリー自立化の動きを防ごうとしたハリーファやアッディズビリーの意圖をそこから讀み取ることは可能であろう。ファーティマ朝があえてマディーナにワーリーを置き續けた理由の一つとして、以上のようなことが考えられるのではないだろうか。(46) したがってこのことをもってマディーナ内の市民の動きが停滯したとする必要はなかろう。

本稿ではバカラクの觀點に缺けていたマディーナ内の狀況を檢討することによって、ハラブのカルアが支配者の據點となった背景を考察した。十一世紀初頭には市民が支配者に對抗しうる力を持っていなかったハラブにおいて、ミルダース朝時代に入ると舊支配者層の軍人・兵士と一般市民が結合する形でアフダースの活動が活潑になる。それに伴い支配者にとってのカルアの重要性は增大し、ミルダース朝の君主たちはそこを據點としたのである。十二世紀に入ると多くの建築がハラブのカルアに行なわれはじめるが、ハラブのカルアの建築史上華々しいこの時代は、十一世紀に準備されていたと

**表2　ファーティマ朝下のハラブにおけるマディーナとカルアのワーリー**

| wālī の在任期間 | wālī/wālī al-madīna | wālī al-qal'a | 出　　典 |
|---|---|---|---|
| 413.7/1022.10 ～<br>414.1/1023.4 | Ṣafiyy al-dawla Muḥammad<br>①'Aliyy (nāẓir fī al-Shām)<br>②'Aliyy b. Ja'far (wazīr, Kutāma 族有力者) の子<br>③al-Ẓāhīr (khalīfa) の權威下 | Yumn al-dawla Sa'āda<br>①'Aliyy (nāẓir fī al-Shām)<br>②khādim<br>③al-Ẓāhir (khalīfa) の權威下→解任日不明 | Y. CH: 239<br>ZH: 1/221 |
| 414.1/1023.4 ～<br>415.4/1024.7 | Sanad al-dawla al-Ḥasan b. Muḥammad<br>①?<br>②Kutāma 族有力者，前 Afāmiyya walī<br>③在任中に病歿 | | ZH: 1/222 |
| 415.5/1024.7 ～<br>416.5/1025.6<br>(Ṣāliḥ が Ḥalab を征服) | Sadīd al-mulk Thu'bān b. Muḥammad<br>①al-Ẓāhir (khalīfa)<br>②前任者の兄弟，前 Tinnīs walī | Mawṣūf<br>①Sadīd al-mulk Thu'bān<br>②khādim (スラブ白人，al-ḥākimiyy のニスバ)<br>③al-Ẓāhir (khalīfa) の權威下→Ṣāliḥ に處刑される | Y. CH: 246—48<br>ZH: 1/222—23, 27, 29, 30 |
| 429.9/1038.6 ～<br>433.6/1042.2<br>(Thimāl が Ḥalab を征服) | Raḍiyy al-dawla Banjūtikīn<br>①al-Dizbiriyy (amīr al-juyūsh 在 Dimashq)<br>②①の ghulām<br>③433.6/1042.2 に降伏 | Fātik<br>Sabuktikīn<br>①al-Dizbiriyy (amīr al-juyūsh 在 Dimashq)<br>②①の mamlūk<br>③434.2/1024.10 に降伏 | ZH: 1/257, 61—62 |
| 449.11/1058.1 ～<br>452.8/1060.8<br>(Maḥmūd が Ḥalab を征服) | Makīnal-dawla Ibn Mulhim (nā'ib)<br>①al-Mustanṣir (khalīfa)<br>②Kutāma 族有力軍人<br>③對ビザンツ戰に活躍 | Rukn al-dawla<br>①Ibn Mulhim 他 (nā'ib たち)<br>②? | IH: 215, 27—31, 35, 60, 61<br>SM: 175<br>ZH: 1/274—80 |

(注) 表中の數字はそれぞれ①任命者②經歷③備考を示す。
特に注記の無い場合，任命者はハラブにいたことを示す。
特に注記の無い場合，カルアのワーリーの在任期間はマディーナのワーリーと同じ。

も言えるのである。

なお本稿は、一九九〇・一・二〇に東洋文庫で行なわれた「イスラム國家論研究會」における口頭發表に基づいている。當日貴重な助言を頂いた出席者の方々にこの場を借りて御禮申しあげる。

## 註

(1) J. Sauvaget "Ḥalab", *Encyclopaedia of Islam*, new ed., Leiden, 1960— (EI² と略). また本稿註(2)(3)に擧げた諸研究も參照のこと。

(2) J. Sauvaget, *Alep*, Paris, 1941 (Sauvaget 1941 と略)。なお、この文獻は、佐藤次高氏の御厚意によりその藏書を利用させていただいた。ここに記して謝意を表する。

(3) H. Gaube und E. Wirth, *Aleppo*, Beihefte zum Tübinger Atlas des vorderen Orients, Reihe B (Geisteswissenschaften) Nr. 58, Weisbaden, 1984 (Gaube/Wirth と略).

(4) J. L. Bacharach, "The court-citadel: an Islamic urban symbol of power", *The Proceedings of the International conference on urbanism in Islam* vol. 3, Tokyo, 1989: 206—45 (Bacharach と略). なお引用に當たっては、著者に承諾を求めた。快諾されたバカラク氏に謝意を表する。

(5) この時代のハラブおよび北シリアの歴史(主に政治史)を扱った研究としては、Sauvaget 1941 以降次のようなものが出た。S. Zakkar, *The emirate of Aleppo 1004—1094*, Beirut, 1971 (Zakkar と略); K. S. Salibi, *Syria under Islam*, New York, 1977; P. Smoor, *Kings and bedouins in the palace of Aleppo as reflected in Ma'arri's works*, Louvain, 1985 (Smoor と略); T. Bianquis, *Damas et la Syrie sous la domination fatimide (359—468/969—1076)* vol. 1, Damas, 1986 (Bianquis 1986 と略). なお私は、蒐原卓氏から Bianquis 1986 の存在を教示され、その利用にあたっては藏書をお借りした。ここに感謝の意を表す。その後一九八九年に第二巻 (Bianquis 1989 と略) が出版されて完結した。

(6) 大稔哲也「ザンギー朝の統治と行政官——モスル・アターベク王朝の場合——」『東洋學報』六九／三・四(一九八八)五〇—五二; Bacharach: 207.

(7) 文獻以外の史料としては碑文が考えられるが、本稿が扱う時期でカルア内にあるものとしてはミルダース朝のマフムードに歸される碑文が一例知られているのみである。またそれが本來あった場所は不明という〔Zakkar: 183; Gaube/Wirth: 168—70〕。

次に本稿における最も基本的な史料に説明を加えておく。ZH と BT の著者イブヌルアディーム（五八八—六六〇／一一九二—一二六二）は代々ハラブのカーディー qāḍī を輩出した名門の家系に生まれ、彼自身もハラブのアイユーブ Ayyūb 朝君主アルアズィーズ al-ʿAzīz（在位：六一三—三四／一二一六—三七）とアンナースィル al-Nāṣir（在位：六三四—五八／一二三七—六〇）にカーディーやワズィール wazīr として仕えた。彼はこの立場を利用してハラブに關する史料を收集し、大部なハラブ地誌・人名辭典である BT を著した。これは完全には傳わらず、現存の寫本もほとんど校訂されていない。本稿では部分的に校訂出版された BT.A の他、最近出版され始めたファクシミリ版 BT.FM を利用した。ただし後者は部分的にしか參照できなかった。イブヌルアディームはこの人名辭典を元にして編年體のハラブ史 ZH をまとめた。以上のような成立過程から、かなり後世の作品であるにもかかわらず、彼の著作はハラブに關しては最もまとまった情報を提供してくれる。この人物については Zakkar: 23—26; B.Lewis, "IBN AL-ʿADĪM", EI² を參照。

十一世紀初期の同時代現地史料としては、ヤフヤー＝アルアンターキー（三七〇／九八〇頃—四五五／一〇六三頃）の年代記 Y.CH, Y.KV が重要である。彼はエジプト生まれのキリスト教徒醫師で、四〇五／一〇一四—一五年にアンティオキアへ移住した。それ以前に書いた部分もそこで入手した史料に基づいて改訂したと自ら述べており〔Y.KV: 10—11〕、〔移住以前の記述についてもかなり信頼がおけると考えられる。校訂は二種類出ており、Y.KV の方がすぐれているが四〇四／一〇一三年の記事で終わっている。この人物および著作については、J.H.Forsyth, *The Byzantine-arab chronicle of Yaḥyā b.Saʿīd al-Anṭāki*, 2vols., Univ. of Michigan, 1977（學位請求論文）が參考になる。特に一—二八を參照。

十一世紀半ばに活躍したファーティマ Fāṭima 朝の敎宣員 dāʿī アルムアイヤド＝フィッディーン（四七〇／一〇七七—七八沒）の手記 SM には、ミルダース朝のシマールが統治した時期の北シリアについて、他の書物には見られない著者の體驗に基づく情報が含まれている。この人物については C.Brockelmann, *Geschichte der arabischen Litteratur*, 5vols., Leiden, 1937—49, Supplementband I, 714 を參照のこと。

（8）Gaube/Wirth においても同様の議論がなされているが、Sauvaget 1941 と同じ議論を繰り返したものにすぎないので、後者と一括して扱うことにする。またバカラクは、ハラブの事例に關しては前者に依據している〔Bacharach: 230, n. 9〕。

（9）内容はハラブの歴史と地誌である。この書は後世にかなり手が加えられたもので、著者および題名についても異論がある〔太田敬子「Ibn ash-Shihna のアレッポ史についての研究」『オリエント』三二／二（一九八九）九〇—一〇二；Sauvaget, "*Les Perles choisies*" *d'Ibn ach-Chihna*,

Beyrouth, 1933: XII—XV〕。なおここに擧げたソバジェの著書は Ibn al-Shiḥna のフランス語譯である。

(10) ハラブの地誌。著者 'Izz al-dīn Ibn Shaddad はハラブの生まれ。ハラブのアイユーブ朝に仕えたが、モンゴル來襲時にエジプトへ亡命し(六五九／一二六一)當地で A'ṯāq を執筆した〔D. Sourdel, "IBN SHADDĀD 'IZZ AL-DĪN ABŪ 'ABD ALLĀH MUḤMMAD B. 'ALĪ AL-ḤALABĪ", EI²〕。

(11) 彼が用いなかった史料の中で特に重要なのが Y.CH, Y.KV である。

(12) この事件については、ザッカールが史料間の異同を含めすでに詳しく紹介している〔Zakkar: 106〕。

(13) 本稿では、ヒジラ hijra 暦の月名もムハッラム al-muḥarram 月を第一月とし漢數字で示す。

(14) 以上の事例以外に參考になる記述を擧げておく。まずミルダース朝時代の詩人イブンアビーハスィーナ Ibn Abī Ḥaṣīna・イブンハイユース Ibn Ḥayyūs の詩には、ミルダース朝の君主たちがカルアにあった廣間で酒宴を開いている模様などがうたわれている。しかし具體的な部屋の様子は十分讀み取れない〔Zakkar: 263〕。また四四〇／一〇四八—四九年頃にハラブを訪れた醫師イブンブトラーン Ibn Buṭlān は「その(カルアの)上には一つのマスジド masjid と二つの敎會 kanīsa がある」と述べている〔MB: 2/283 (Ḥalab)〕。A'lāq: 39 によれば、敎會の一つはミルダース朝時代に會衆モスク masjid jāmi' に建て替えられた。この情報もイブンブトラーンの書簡に據っているが、MB には記されていない。

(15) シマールが「ハラブに館 dār を建てた 'amara」とあり、そこに刻まれた詩が紹介されている。さらに彼は、その館の鄰に別の館を所有するよう登記し kataba la-hu、それはイブヌルアディームの時代には Ḥammām al-Wāsāniyy の向かい側にあった〔ZH: 1/272〕。このハンマームは、ジャーミの北東約三百メートルの所に位置し、少なくとも一九三〇年まで存在したことが確認される〔ZH: 1/272 n.3; Gaube/Wirth: 366 no.187〕。

(16) ミルダース朝の諸君主はベドウィン出身であり、その生活様式を保ち續けたとされている〔Zakkar: 81—83〕。しかし彼らが郊外のキャンプ地で過ごしていたことを示す記述は見當たらない。キラーブ族のキャンプがハラブ郊外にあったことを示す記事〔Y.CH: 257; ZH: 1/238〕や、ミルダース家以外のキラーブ族有力者がハラブ郊外のキャンプ地に居たこと〔ZH: 2/22〕は、史料中に散見される。

(17) しかし行政機能がすべてカルアにあったわけではないようである。詳細は不明だが、dīwān〔本稿:七七事例 a〕や dār al-sulṭān〔ZH: 1/256〕といった行政機關と思われる施設がマディーナ内にあったことを示唆する記述がある。また、前者の事例からマフムードの書記アブーナスルの館がカルア外にあったことが窺われる。さらに、アティーヤのワズィールを務めた Abū al-Ḥasan 'Aliyy b. Yūsuf の館は十三世紀には al-Madrasa al-'Aṣrūniyya として知られている

〔ZH : 1/293 ; A'īaq : 98〕。

(18) Abū Muḥammad Lu'lu' al-Sayfiyy al-Jarrāḥiyy. もとサイフッダウラに仕えたグラーム軍人。サイードッダウラ Sa'īd al-dawla の死後、その息子を追放してハラブの支配権を握った〔ZH : 1/195—97 ; Smoor : 20, 76—79〕。彼もシナーン門の近くに宮殿を持っていたことが記されているが〔ZH : 1/197〕、それ以上の情報は無い。おそらくマンスールはこの父の宮殿を相續したのであろう。

(19) この人數に關しては、史料によって五〇〇から一〇〇〇までの異同があるが、同時代史料のヤフヤーがおそらく最も正確だろう〔Zakkar : 49—50〕。いずれにせよかなりの人數であることは確かである。

(20) この人物については Smoor : 94—132 が詳しい。Zakkar : 59—61 ; Bianquis 1986 : 322—24 も參照。

(21) 四一五／一〇二五年にサーリフがハラブのマディーナに入った時、ファーティマ朝側は「アズィーズッダウラ＝ファーティクがカルアに接續して muttaṣila bi-l-qal'a 建てた館に上って籠城した」〔Y.CH : 246〕とある。

(22) 四一五—一六年の例は前註を參照。四三四年の例は ZH : 1/261。

(23) C.Cahen, "Mouvements populaires et autonomisme urbain dans l'asie musulmane du moyen âge" I—III, *Arabica* 5 (1958) : 225—50 ; 6 (1959) : 25—56, 233—65 (Cahen と略); A.Havemann, *Rīāsa und qadā'*, Berlin, 1975 (Havemann と略). また太田敬子「ミルダース朝の軍隊編成」『イスラム世界』二五・二六（一九八六）：二六—四八（太田と略）にも部分的に言及されている。十一世紀末以降については E.Ashtor, "L'administration urbaine en Syrie médiévale", *Rivista degli Studi Orientali* 31 (1956) : 73—128 (Ashtor と略)；大川原香子「ヒジュラ暦五—六世紀のアレッポにおける都市自治について—特にライース職の役割を通して—」『寧樂史苑』二九（一九八四）：二七—四九（大川原と略）がある。なお Havemann の利用に際しては、菊池忠純氏のお世話になった。記して感謝の意を表す。

(24) ハムダーン朝サアドッダウラの息子で、ルウルウ父子の壓迫を受けてビザンツ帝國に亡命していた。アフマド＝ブン＝マルワーンに娘を嫁がせている〔Y.CH : 210 ; ZH : 1/198—99〕。

(25) マンスールが亡命した後ユダヤ人とキリスト教徒の家が略奪にあっている〔Y.CH : 214 ; ZH : 1/209〕。また亡命を計劃したアブルハイジャーが、マンスールに仕えるキリスト教徒商人に相談したという話も傳えられている〔ZH : 1/198—99〕。マンスールは非ムスリムと深いつながりを有していたのかもしれない。

(26) カーエンはこれらの人々がハラブで騷亂を起こした remue としているが、不正確な表現であろう。またこの事件を四〇六年とし Y.CH の引用ページとして二一〇を擧げているが〔Cahen : 15—16 n.5〕、いずれも誤りである。

(27) 兩者の間で取り決められた約束を見ても、ハラブ市民がこ

の争いを通じて自分たちの主張を實現した様子は見られない〔Y.CH：212—13；ZH：1/206—07〕。

(28) マンスールを追い出してハラブを支配したファトフに對し、ファーティマ朝は代替地を與える代わりにハラブのカルアを明け渡すように求めた。一方サーリフは、自分と協力してファーティマ朝を排除することをファトフに提案する。ファトフが後者の提案に傾いていることが知れわたると、ファーティマ朝の支配を望むハラブ市民 ahl Ḥalab がカルアの下に集まり暴動 fitna が生じた。結局、ファーティマ朝軍が到來し包圍する中で、ファトフはカルアを明け渡す〔Y.CH：215—16；ZH：1/215〕。ハラブ市民が暴動という形で政治的な主張を示し、支配者に一定の影響力を與え得たと言える。しかしファトフの決斷を促した最大の要因は、ファーティマ朝軍の壓力であろう。また、市民たちがその後のファーティマ朝の支配にも影響を與え續けたかどうかは不明である。

(29) 以上のサーリムに關する情報は、特記したもの以外は BT.FM：9/377—78 による。ザッカールも彼について言及しているが、ハースィド丘の戰いに關しては觸れていない〔Zakkar：259〕。

(30) BT.FM：9/378. この記述は、詩人アルマアッリー al-Ma'arriyy（四四九／一〇五七歿）の弟子であったイブヌルムハッザブ Ibn al-Muhadhdhab〔Zakkar：15, 259〕の著作からの引用である〔BT.FM：9/380〕。ほぼ同時代の史料に據っていることから信用性が高いと言えよう。この事件についてヤフヤーは單に「ハラブに任命した」と述べるだけである〔Y.CH：247〕。ディマシクの記述では、これ以前の部分でアフダースに言及しているから〔Y.CH：227〕、彼がこの用語を知らなかったわけではないので少し妙ではある。しかし BT の記述を否定する必要はないであろう。

(31) 上述の反亂の結果サーリムが處刑された後の時期については、ハラブにおけるライースとアフダースの構成員を分析し得る情報を得られなかった。ミルダース朝のハラブ支配が終わる四七二／一〇八〇年に現れるアルフタイティー al-Ḥutaytiyy 以前にライースとして確認できるのはこのサーリムだけである〔Cahen：15—17；Havemann：92—96〕。それ以後はザンギー Zangiyy 朝がハラブを支配する一一二〇年代末に至るまでライースの活躍が繼續して見られる〔Ashtor：95—100; Cahen：17—19; Havemann：96—104; 大川原〕。

(32) この二人の人物については不詳。前者は qāḍī al-Shām という肩書きを持つ。

(33) 直接アフダースという語は出てこない。襲撃に參加した人物として Kindiyy, Ibn al-Zaghriyy, Ibn 'Antar, Ibn al-Nāqid という四名の名前が擧げられている。そのうち Kindiyy という名は同年末にシマールによって捕えられたアフダースの中にも見える〔ZH：1/283〕。

(34) トルコ人軍團に對してミルダース朝君主やハラブ市民が恐怖心を抱いていたことについては、太田：四〇を參照のこと。

(35) カーヒンは事例 a の al-Ḥalabiyyūn をハラブの名望家たち notables と譯しているが〔Cahen: 16〕根據を明示していない。また、引用ページ ZH: 1/261 も誤っている〔Cahen: 16 n.2〕。

(36) この事件の背景については Zakkar: 148—154 を參照。なおカーヒンは四五〇年としているが〔Cahen: 16〕、實際は四四九年の出來事である。

(37) 「アーンマの方がハーッサ al-khāṣṣa よりも、その行爲（アフダースがマディーナ外へ出たこと）が意味することについてよりよく知る a'rafu bi-mā yurādu fī'l-hu ようになった」〔SM: 172〕。イスマーイール派の用語法では、アーンマはスンナ派信徒を指しその對義語であるハーッサはイスマーイール派信徒を指すことがある〔F. Dachraoui, *La Califat fatimide au Maghreb*, Tunis, 1981: 91 n.164〕。シーア派内での區別は不明だが、教宣員であるアルムアイヤドはこの用法に從っていると思われる。この點については、蒐原卓氏から御教示を得た。ここに記して謝意を表する。

(38) 單數形は 'iqāl, shikāl で、ラクダなどの脚を縛る紐のこと。

(39) ハムダーン朝時代以來ハラブでは十二イマーム派が優勢であった。政治的にはサアドッダウラの在位期からファーティマ朝の宗主權下に入っていたので、フトバではファーティマ朝ハリーファの名が唱えられていた〔H. M. Khayat, "The Śī'ite rebellions in Aleppo in the 6th A.H./12th A.D. century", *Rivista degli Studi Orientali* 46 (1971): 168—70; Zakkar: 250—54〕。

(40) ZH: 2/18 にはこの言葉が入っている。

(41) この事件については ZH: 2/17—18; KT: 8/108—09（四六三年の項）にもほとんど同じ内容の記述が見られるが、アフダースの活動は MZ にのみ現れる。この時バグダードから al-Zaynabiyy という使者がマフムードの下に到來しているから、バグダードで書かれた歴史書に多くを據っていると思われる MZ〔C. Cahen, "IBN AL-DJAWZĪ, SIBṬ", EI²〕の方がこの件に關してより詳細な情報を含んでいても不思議はない。

(42) アフダース以外にもアーンマやナースと呼ばれる人々が史料の中に見出されるが、用語法は史料によってかなり異なっているようである。これらの用語で括られる人々については、一般市民に屬するということ以外には明言できない。

(43) 「〔ファーティマ朝ハリーファ＝〕アッザーヒルとその息子アルムスタンスィルは、アズィーズッダウラ＝ファーティクから生じたことが生じることを恐れて、マディーナにワーリーを置き、カルアにワーリーを置いた」〔BT. FM: 1/101; cf. ZH: 1/221〕。

(44) 情報量の多いマウスーフについて、ミルダース朝のハラブ征服時における行動を見ると、①マディーナにいたサーリムを處罰しようとしていること、すなわちマディーナに關する事項にさえ關與したこと、②講和の交渉に際して、ワーリーのサディードルムルクがカルアに籠城していたにもかかわらず、マウスーフがファーティマ朝の代表として振舞ってお

り、逆にワーリーの名はまったく出てこないという二點が讀み取れる〔Y.CH：246—48〕。上の記事はカルア明け渡しの交渉ではあるが、事實上ハラブの支配權の引き渡しに他ならない。もしマウスーフがワーリーに服屬する立場にあるのなら、少なくともワーリーの名が併記されるのが自然である。以上の點から、カルアのワーリー＝マウスーフはハリーファ直屬の役職として任命され、ワーリー＝サディードルムルクから獨立して權力を行使していたと考えられる。サアーダの場合は情報が少なく行動の分析はできないが、ほぼ同時期の例であり、マウスーフと同じハーディムであることから、彼もワーリーから獨立していたと考えられる。

(45) 四三三・六・二八／一〇四二・二・二二、バンジュテギンがミルダース朝のシマールにマディーナを明け渡す〔ZH：1/260〕。しかしその後もセビュクテギンは半年餘りの間籠城し、四三四・二・一四／一〇四二・一〇・三にようやくカルアから降りた〔ZH：1/261—2〕。バンジュテギンが投降することは、ハラブ全體の支配權がミルダース朝に引き渡されることを意味せず、セビュクテギンは獨自にカルアを守る責務を負っていたと言える。そしてマムルークである彼は、誰よりもまず主人のアッディズビリーに對して責任を負っていたと考えられる。この事例の場合は主人がすでに歿していた（四三三・五・一五／一〇四二・一・一〇）〔ZH：1/260〕ので、忠誠を盡くす對象は主人の遺族であった。このことは、彼がカルアを放棄する前に「自分のために三萬ディーナールを取り、アッディズビリーの相續人たちのために三萬二千ディーナールを取った」〔ZH：1/262〕ということから窺い知れる。ファーティクについては任命時に名前が見えるだけで具體的な行動を示す情報は無いが、彼もアッディズビリーのマムルークであることからセビュクテギンと同樣の立場にあったと考えられる。

(46) これ以外に、ファーティマ朝はイスマーイール派の擴大を重要な政策としていたため、マディーナ内に對して無關心ではいられなかったという點も考慮に入れるべきであろう。ファーティマ朝の教宣活動については以下の文獻を參照。蒐原卓「シーア派の反擊」『イスラム・轉變の歷史』（森本公誠編、講座イスラム二、筑摩書房、一九八五）六〇—六三。同「al-Majālis wa al-Musāyarāt にみられるファーティマ朝カリフ＝アル・ムイッズ」『西南アジア研究』二六（一九八七）四〇—四二。

depended for their own demand upon the rice which was produced in the areas around the upper and middle stream of Changjiang 長江 and then was transported to them via Jiangsu 江蘇 and Suzhou 蘇州. This supply-demand relationship brought this region short-term rises in the price of rice under the influence of some elements on the part of the circulation system.

To keep the rising control, the local government of Zhejiang had to take great measures, among which of great importance were food circulation management policies executed under its own direction. Finally, in the 24th year of the Qianlong 乾隆, it introduced a new rice-supply system through which Zhexi would receive stored rice of Fujian 福建, the latter's loss being made up for with rice from Taiwan 臺灣. This new system was to fix itself in Zhexi and grow into a second constant rice-supply route employed by the local government, with the result that the importance of the Changjiang route turned out to be relatively played down.

## QAL'A AND MADĪNA IN THE 11TH CENTURY ḤALAB

TANIGUCHI Junichi

In the 11th century the function of the qal'a of Ḥalab (Aleppo) changed from that of a purely military installation to a residence of rulers. A Ḥamdānid ghulām Maṣūr, who ruled Ḥalab at the beginning of that century, had his palace within the madīna and garrisoned the qal'a. However, most Mirdāsid rulers (1025–80) used the qal'a as their residence.

The main reason for this change was a transformation of the situation within the madīna. During the period of Manṣūr the citizens of Ḥalab had no military force with which they could have resisted their ruler. In the Mirdāsid era, however, the aḥdāth, a kind of urban militia, gained a measure of control over rulers within the madīna. The aḥdāth of Ḥalab armed themselves and consisted of not only citizens but also Ḥamdānid ghulām soldiers, and their leader Sālim was at one time a high ranking

officer under Manṣūr. They were fairly autonomous and they maintained the public peace within the madīna. The Mirdāsids then chose the qal'a as their residence. Their successors, the 'Uqaylids, the Saljūqids, the Zangids and the Ayyūbids, also used it as their palace.

## THE CHARACTER OF *KITĀB-I BAḤRĪYA*
## —on the Text of the Manuscript of Ayasofya 2612—

SHINTANI Hideharu

The construction and the contents of the text of Ayasofya 2612 manuscript of *Kitāb-i Baḥrīya* (a manuscript of the text of the year 932, owned by Süleymaniye Kütüphanesi in Istanbul) were examined as fundamental work to consider the relation between the Ottoman Empire and Mediterranean World. As a result, the following points became obvious.

(1) The current of narration of the text has regularity, but in the area of Aegean Sea and East Ionian Sea and that of West Mediterranean Sea (especially the part of the north coast of West Mediterranean Sea) the regularity is broken obviously.

(2) As for the quantity of description of the text per area, the weight of the area of Aegean Sea and East Ionian Sea and that of Adriatic Sea and West Ionian Sea are large.

(3) As for the quantity of description of the text per chapter, that of the area of West Mediterranean Sea especially the part of the north coast is peculiarly large.

(4) The historical information of the text is relatively much in the area of West Mediterranean Sea and that along the north Africa. The reason is that descriptions over acts like piracy or conquest of Pīrī Ra'īs are many.

(5) The north coast of West Mediterranean Sea has a peculiar character